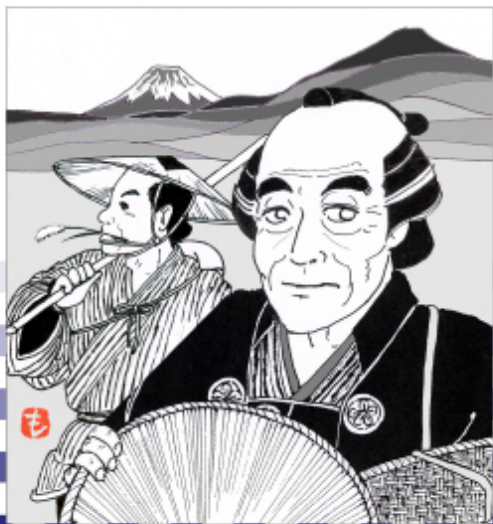


かんお
神尾鯨動

杉久保・木郷・寺尾・赤羽様
～正義に生きた農民の記～

長田進治



Seito 文庫

かんお
神尾騒動

杉久保・本郷・寺尾・赤羽根
～正義に生きた農民の記～

長田進治



海援書林版

妻・志希しき

江戸は神田橋、春まだ浅い武家屋敷には凜とした空気が流れ、朝の陽射しが松の緑に射し込んでゐる。晝の冷たさすら心地よく、知行地の民は青く若い井草いぐさの香りを吸い込みながら深々と平服した。

「寒いなかお疲れでございました。治右衛門じえもん、権左衛門ごんざえもん、いつも欠かさずのご出府しゅつぷ、本にご苦勞様くるわさまです」

「ありがたきお言葉。御前様におかれましてもお変わりないご様子、何よりと存じます」

相模の国高座郡杉久保村の名主・高橋治右衛門は本郷村の名主・吉川権左衛門と共に春の年貢を納めるため、領主である旗本・神尾稻三郎かんのの屋敷に出府してい

た。歳は今年四十五、胴長な腹の周りにいくぶん肉が付き、出府のために剃り上げた月代さかやきの周りには白いものが目立ち始めている。五年前に父親から引き継いだ名主としての自覚が額に三筋の皺を刻むが、生来の明るい性格が愛嬌のある目じりにも皺を寄せていた。

治右衛門らを迎えた神尾稲三郎の妻・志希しきは両の頬にえくぼを作りながらねぎらしいの言葉をかけた。小柄だがいつ見ても背筋をしゃんと伸ばし、小動物のようなくりつとした目で相手を見つめる。立場の違いを思えば不謹慎な話ではあるが、治右衛門にとつては娘のように愛くるしい存在であった。十五の歳で神尾家かんおに嫁入りしてからもう十年の月日が過ぎるが、いまだ子宝に恵まれない。当主の稲三郎もすでに若いとは言えず、治右衛門は「御前様も家内ではさぞかし肩身の狭い思いをしているのでは」と、会うたびにおもんばかりが、明るい性格の志希はそうした様子を微塵も感じさせたことがない。

「硬い挨拶はよい、楽になさい。ただあいにく殿は急な用でお城へ参内しており

ます。なんでも井伊様が大老になられてから、攘夷派じょういの取り締まりを厳しくしたとかで、殿も何かとお忙しいようです。明日改めてのご挨拶、お済ませ下さいませようにな」

時は幕末。天皇の勅令を得ないまま日米通商条約を結んだ大老・井伊直弼なおすけと、それに反発する攘夷派との摩擦が高まった。これを厳しく弾圧した井伊の行いは後に安政の大獄と呼ばれ、この日からひと月足らずの後、井伊直弼は桜田門外で暗殺されている。世に言う「桜田門外の変」である。

「承知致しました」

あいにく殿様は留守だというが、こうして待たされることは珍しいことではなく、知行地の代表である名主が江戸の主家に出府すれば、一、二、三日逗留することはざらである。

神尾稻三郎は相模の国の杉久保村（海老名市）、本郷村（同）、寺尾村（綾瀬市）、

赤羽根村（茅ヶ崎市）の四ヶ村、併せて四百石を所領する小さな旗本である。江戸時代後期、旗本にはそれぞれ位に応じた知行地と呼ばれる領地が与えられ、その地からの年貢によつてお家を維持していた。領地とはいふが、支配する者とされる者といつた関係はさほどに厳しいわけではない。旗本からすれば、特に地縁も血縁も無い地を幕府からあてがい扶持ふちで与えられたものであり、屋敷を構えることも許されていない。まして長い太平の時代が続いた幕末の今、領主は何か騒動でもない限り、領地まつりごとの政は、代官と村を代表する名主に任せている。

一方その名主はというと、村人から年貢を徴収して領主に納めるほか、様々なおめ事の解決、祭や仏事の主催、寺ごとに住民の台帳を整理する宗門しゅうもん人別改帳にんべつあらためちようの管理など、かなり責任の重い役割を果たしている。杉久保、本郷、寺尾、赤羽根この四つの村にそれぞれに名主がいるわけだが、この名主には名字帯刀が許されており、中でも杉久保村の高橋治右衛門は四ヶ村を代表する立場にある。今年も村々で収穫した米を現金に換え、年の明けた初午はつうまの今日、本

郷村の名主・権左衛門と共に年貢を納めるため、江戸は神田橋にある主家・神尾家に出府したのだ。

「村の者たちは元気にしておるかい」

志希は遠いものでも見るような瞳で二人に尋ねた。

「はい、おかげ様で大きな事件も無く、皆無事に暮らしております」

治右衛門は深々と頭を下げながら答えた。

「かしこまらなくとも良い、さあ座布団をあてなさい」

「そのようなこと、滅相もございません」

ここは丁重に辞退した。

「そうかえ……して、去年は米の出来ばえが思わしくなかったような話も聞きました、皆は困っておるのでないかえ」

「確かにそちらの方は、作が悪い上に米相場の方もあまり良くございませんで、それでこの度は、春の年貢を二度に分けてお納めさせて頂ければと、お願いに何っ

た次第でございます」

今回の出府はその事を殿様に願ひ出ねばならず、治右衛門には少々気の重い出府であつた。

「頭をお上げなさい。作物の出来、不出来はお天道様しだい。そのようなことだと思つたので、当家も生活を切り詰めるよう、用人たちに申しつけたところですよ」
志希はいつも努めて明るく、そしてにこやかに名主たちに接した。

そしてもう一人、治右衛門の隣にいる本郷村の名主・吉川きつかわ権左衛門は二十九の若さで父親から名主を引き継いで間もない。今日は初めての出府に緊張し、言葉も出ず、日焼けした精悍な体を小刻みに震わせている。

「それよりも権左衛門」

「は、はい」

急に話を振られて若い権左衛門の心臓が高鳴つた。

「お千代の様子はどうじゃ」

「へえ、ご、御前様のおかげ様で、薬もよく効いて下さいます、最近じゃあよく親の手伝いをするようになってござります」

ちぐはぐな敬語が青い畳の上に転げ出たが、志希は気にする様子もない。

「そうかい、それは良かった、私はもう一度、是非ともお前たちの村へ行きたいと思っておるのじゃ」

